

公益財団法人京都 Y M C A

## 2021 年度事業報告

2021 年 4 月 1 日～2022 年 3 月 31 日



1、2021 年度事業報告

2、事業概要

3、データ編

# 公益財団法人京都YMCA

〒604-8083 京都市中京区三条通柳馬場東入中之町2番地

# 2021 年度事業報告

## 2021 年度年間聖句

だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。

コリントの信徒への手紙Ⅱ 4章 16 節

## 2021 年度事業計画

自然体験や、スポーツ活動、文化活動を通して、プログラムに参加する一人ひとりの全人格的な成長を促し、健やかな心と体を育みながらたくましく成長をはかる活動を展開する。プログラムを通していのちを守ることの大切さを学ぶとともに、生涯にわたって生き生きとした人生を歩み、社会の一員として貢献できるように指導する。

- ① 各プログラムの公益性を点検し、事業の公益性を強調し参加者の理解を広げる
- ② ひとり親や、共働き家庭の支援のためのアフタースクールの拡大を図る
- ③ 高齢者や女性の生活クオリティ向上のためのプログラムを開発し実施する
- ④ 舞鶴 YMCA を京都府北部拠点として、リトリートセンターを京都府南部の拠点としてウエルネス事業の新たな展開を図る

こどもから大人まで全ての人がボランティアを通して地域社会ならびに国際社会に貢献することができるように、ボランティアを育成し、ボランティアの手による地域社会および国際社会への貢献事業を進める。

- ① ボランティア増強のためのボランティア活動の場を提供する
- ② 地域課題に取り組む新たなプログラムの開発に着手する。
- ③ 海外の YMCA と協力しユースの取り組む SDGs のセミナーを実施する。
- ④ 公益活動のための寄附金拡大を図る。
- ⑤ コロナ禍に対応し、デジタル化によるオンライン参加可能なプログラムを実施する

乳幼児の成長過程において必要な情緒的、身体的、知的体験教育を、保育事業を通じて統合的に推進するとともに、共に支え合う地域社会の実現を展望しつつ、子育てボランティアの育成なども含む広範な子育て支援事業を展開することで、乳幼児期のこどもたちの健全な成長及び発達を促す。

- ① 地域の子育て支援の拠点として未就園児を対象とした子育て支援プログラムの実施
- ② こども子育て支援事業の安定的運営を確立する
- ③ 保育人材の安定的確保を図る

## 2021 年度を振り返って

新型コロナウイルスの感染拡大の事態も、変異株の出現によりこの年度も収まらず、引き続き感染拡大の影響を受ける年となった。

年度開始の 4 月から蔓延防止等重点措置、緊急事態措置が相次いで発出される事態となった。

しかし、前年の緊急事態宣言と異なり、事業への制限の要請が限定的であったために、前回より中止期間も比較的短期で終えることができた。

ただし実施にあたっては、感染予防のさらなる対策を取りながら進めていくこととなった。

コロナ禍ではそれまで対面で行ってきた様々なプログラムやミーティングをオンライン開催や、中止とするプログラムもあり、実施するにあたって工夫を凝らしながら開催してきたが、感染が少し治まってきた秋からは、感染防止策を取りながらいくつかりアル開催することにも取り組んできた。

### 〔公1 こどもから大人までの健全な心身の発達を促進するウェルネス事業〕

今年も前年度に続いて年度始めから、緊急事態宣言が発出されたが、学校等も全面休校とはならなかったことで、事業休止は 4 月から 5 月半ばまでの期間だけの短期間で済んだ。その後は、緊急事態宣言下でも京都市からの委託を受けて実施している高齢者筋トレの教室や時短要請の出ていた成人対象の夜 8 時以降のプログラム以外は感染防止措置を取りながら、通常通りに行った。

7 月以降デルタ株による感染拡大で蔓延防止等特別措置が出た際も、同様に感染防止に注意を払いながら事業を継続した。

毎年 6 月に水上安全キャンペーンとしてスタッフが近隣の小学校で着衣水泳などの指導を行う水上安全講習は、小学校を訪問することができないため、今回オンライン

で動画配信という新しい取り組みを行った。

前年度は開催されなかった競技ごとの大会等も 7 月以降、夏休みにかけていくつか開催された。オンラインを併用して行われた全国YMCA水泳大会や、競泳京都夏期選手権等の大会などにスイミングスクールの子供たちが参加した。

また、11 月には中日本地区のYMCAが集まって行っているYMCA水泳交歓会を京都YMCAが主幹となって実施した。実施に当たっては、各チームが密にならないように工夫し、移動の動線を工夫するなど感染対策を施し開催した。保護者等の観戦はオンライン配信となった。

野外活動では、テント泊を伴うものは前年度は実施できなかったが、年度当初に京都YMCAをサポートしているワイズメンズクラブ国際協会西日本区京都部のワイズメンズクラブから一人用テントの寄贈を受け、一人用テントを用いてテント泊を伴う野外活動を行うことができた。

夏期キャンプも今年度は感染対策を取りながら以前に近い本数で実施した。

ただ、病気の子供とその兄弟を対象とした「青い空と白い雲のキャンプ」は、毎年行っているサバエ教育キャンプ場からのオンライン配信を行い、例年参加している子供たちが自宅から画面上で参加するという形をとった。

全国のYMCAが文部科学省の委託を受けて「子供たちの心身の健全な発達のための子供の自然体験活動推進事業」として行う自然体験活動は、京都では 3 本のプログラムを企画した。感染拡大のために 1 回は中止となったが 10 月の「森のナチュラルリストキャンプ」と 11 月の「秋のクッキングキャンプ」の 2 回を京都YMCAリトリートセンターで実施し、多くの子供たちの参加を得た。

ユーススポーツは、体操教室は参加希望も多く、キャンセル待ちが出るほどの人気であったが、バスケットボール、サッカーは新型コロナ感染の影響や実施場所の問題もあり拡充することはできなかった。

3 月に京都プリンスワイズメンズクラブの協力で、京都市の旧有済小学校体育館にて、市内の小学生を対象にスポーツを楽しんでもらおうと「ユーススポーツフェスティバル」を実施し、約 50 名の子供たちが体操やバスケットボール、サッカーなどの競技を楽しんだ。

野外研修施設のリトリートセンターの利用者数は、まだ新型コロナ感染拡大前には戻ることはなかったが、少しずつ屋外での活動を楽しもうとする人たちの利用希望が増えてきた。毎年 11 月に行っていたオータムフェスタは、感染者の減少もあり、今年度は実施した。久しぶりの屋外のイベントということで感染対策を取りながらの実施であったが、多くの人が集まり、屋外で秋の自然を楽しむイベントとなった。

徐々に新型コロナ感染も収まりつつあるかと思えたが、1 月から広がったオミクロン株による感染が再拡大し、特に子供たちの間で感染が広がったため、1 月から 2 月にかけて企画していたスキーキャンプでは、キャンセルが相次ぎ、中止せざるを得ないプログラムも出た。

また、1 月末から 2 月にかけてはスイミングスクールやアフタースクールなど少年プログラムで通っている小学校のクラスで感染者が出たためとか、家族に感染者が出たため休みますという連絡が相次いだ。

また 3 月には、通っているメンバーに感染者が出たためにアフタースクール事業を一時休止せざるを得なかった

昨年ほとんどオンラインで実施したボランティアリーダーのトレーニングは、今年度はすべて実際に集まって実施することができオンラインでは伝えにくい内容も今年度はリアル開催で実施することができた。

最後に、長年京都YMCAがキャンプを行ってきた、滋賀県の近江八幡市の琵琶湖畔にあったサバエ教育キャンプ場が、この夏のキャンプをもって閉所することとなり、9 月に関係者が集まって閉所式を行い、73 年の間に多くのメンバーやボランティアリーダーが育ったサバエ教育キャンプ場がその役目を終えることとなった。

## 〔公2 ボランティアによる地域社会及び国際社会への貢献活動〕

昨年に続き新型コロナウイルス感染症の広がる中で人が集まる活動が実施できないことで、会員による地域へのサービス活動も難しい一年となった。

春先からの緊急事態宣言等の発出と夏のデルタ株の感染者増加により、上半期の活動はほとんど中止せざるを得なかったが、感染が少し治まった下半期から徐々に活動を開始した。

国際協力事業として毎年行ってきた国際協力募金は、新型コロナ感染拡大によって困難な状況に置かれているインドの人々のため、京都YMCAがパートナーシップを結んでいるインドランチYMCAの行う地域支援活動の支援のために募金を行った。ランチYMCAより送られてきた現地の感染拡大による社会の状況や、ランチYMCAの支援活動の報告を受けて、ホームページや動画配信を用いて募金のアピールを行い、支援金を募った。

街頭募金は以前のように市内各所で行うことはできなかったが、会員の協力で三条本館前で街頭募金を行い、府民へインドの状況の報告と募金協力を訴えた。

また、国際協力事業として、韓国の仁川YMCAと台湾の台中YMCA、台南YMCAとの共同で、オンラインでのユース交流プログラムを行った。

コロナ禍で、直接の交流ができなくなっている中で、ユースの間での相互理解を深めることを目的とした取り組みで、3 か国で集まった約 60 名の中学生から大学生までのユースが映像等を駆使してそれぞれの国の文化や社会を紹介し、その後の協議等を通じて相互理解を深める取り組みとなった。

2 月末から始まったロシアのウクライナ侵攻で多くのウクライナ国民が戦火を逃れて避難民となった。YMCA世界同盟及びヨーロッパ同盟からの呼びかけに答える形で日本のYMCAでも全国で避難者支援の募金を呼びかけることとなった。

京都YMCAでもウクライナ緊急支援募金を集めることを決定し、京都YWCAと

共同して3月に2回の街頭募金を行った。

当日、約60名の会員が集まり、京都市内で緊急支援募金の呼びかけを行い、多くの協力を得て2日間で約30万円の募金が集まった。この募金は、4月末で最終集計して、一旦日本YMCA同盟に送り、ヨーロッパYMCA同盟を通して、ウクライナ及び近隣諸国のYMCAが行う避難者支援活動に用いられることとなっている。

京都YWCAと共同で11月に開催しているYMCA/YWCA合同祈祷週集会は、今年は「壊れたものからの美しさ」というテーマで、オンラインと集合形式のハイブリッドで開催された。東九条子ども食堂代表の許泊基（ホ・ペッキ）氏を講師に子どもの貧困の問題とコロナ禍での取り組みについて話を聞き、約30名の参加者が講師の発題を受けてともに考える機会を持った。

12月には、前年はオンラインで行った市民クリスマスを、ウイングス京都のホールを借りて開催し、クリスマスの礼拝と京都大学交響楽団の弦楽四重奏の演奏を楽しむプログラムを持った。当日親子連れなど約120名の参加者があり、ともにクリスマスを祝うひと時となった。

チャリティイベントとして、青少年の育成やボランティアの養成等の資金を集めるために行っているチャリティゴルフを1月に滋賀県の瀬田ゴルフコースを会場に開催した。70名の参加者があり50万ほどの寄付が集まった。

全国のYMCAで進められてきたいじめ反対のためのキャンペーン「ピンクシャツデー」は、今年も取り組みを行い、2月23日を中心に各事業部でいじめ反対のアピールと取り組みを行った。

### 〔公3 子育て支援事業としての保育園〕

前年から準備してきた保育園の分園が、三条本館のすぐ近くにあるビルの1階の1室を借りて「YMCA高倉おさなご園」として定員11人でスタートした。

その結果、本園と分園合わせて定員が101名となり、開設4年目にしてほぼ定員を満たした人数でスタートすることができた。

分園ができたことで子どもの特性に合わせて弾力的な運営ができるようになり、本園のすぐ近くにあることで効率的な運営ができるようになった。

地域の子育て支援事業として昨年から取り組んできた「Yわいひろば」は、地域の未就園児とその保護者を対象にマナホールを利用して、おもちゃ遊びや、お絵かきなど親子で触れ合う機会を提供しながら保護者からの育児相談を受ける取り組みを行った。感染拡大により開催を中止した月もあったが、可能な限り月1回の開催を目指して実施し、各回の参加者は多くはなかったが、年間で延べ50名～60名の参加があった。

「Yわいひろば」に来ていた子どもたちから入園に結び付いたケースもあった。2年目を迎えたコロナ禍で子どもたちの外で遊ぶ機会も減ってきている中で、できるだけ体験活動の機会を与えようと、年間を通じて各クラスがリトリートセンターで自

然との触れ合いの機会を設けたり京都市の八瀬野外センターや青少年科学センター、城陽市の文化パーク、京都市動物園や水族館へのお出かけの機会を持った。11月には保護者にも参加してもらい親子リトリートセンター遠足を行った。

本園の特徴でもある、京都YMCAのスイミングや体操のプログラムをこの年度も継続実施し、さらに新型コロナ感染症のために昨年実施できなかった専門学校留学生との交流プログラムを12月にクリスマス会で行った。

この年度は、園児の年度途中での入退園が多く17名の途中退園と10名の途中入園があった。その中には、地域的な特徴もあり、引っ越し等で他地域へ移って行かれる方や他の地域から転入してくる方も多く、引っ越しでいかれた方の中には、新型コロナ禍で仕事がなくなったとか、転勤となって退園していかれたケースもあった。

新型コロナ感染の始まった前年度は保育園での感染者は出なかったが、この年度は園児や職員の感染者が出て、市の指導により指定された期間の休園をせざるを得ない事態となった。特に子どもの感染者が急増した1月末から3月にかけては、園全体及びクラス休園含めて3回の休園措置をとった。

常時換気や子どもたちのマスク着用や食事の際のパーテーションの設置等で感染対策を取りつつ進めてきたが、家庭内感染等による感染は防ぎようもなく、ただ、園内での2次感染3次感染と広がらなかったのは幸いであった。